京都市ごみ減量推進会議・会報誌 2015. 秋

こごみ日和65

特　集：製法から資源の再利用まで「へんこ」を貫く
「人のためになる食べものを作る」原点は創業者である祖父の思い
株式会社 山田製油

ごみ減会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方？」：
株式会社 島津製作所さん

グリーンキーパーがゆく：繊維リサイクルを研究して 25 年
京都工芸繊維大学大学院教授 木村照夫 先生

なごみ日和：広沢池 灯籠流し
KBS 京都 アナウンサー　海平　和

イベント告知：布フェス in 京都
～布ってこんなに〇〇だ！～

地域活動レポート：地域愛を礎に
力を合わせてエコ推進
～豊園地域ごみ減量推進会議～

「このビンに、入れてください」
容器を持参して、欲しい分量の油や酒を
買い求めることができる“はかり売り”
新鮮なものを 必要な量だけ買うことができるので
食の楽しみも広がります。

写真　藤原幸子

ごみにまつわるこの数字なぁに？

1年間に約94万トン排出

答えはWebへ！

※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」をご覧ください。

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！　http://kyoto-gomigen.jp/

手をとりあって ごみを減らそう！
京都市ごみ減量推進会議
ごみ減　検索

特集

製法から資源の再利用まで「へんこ」を貫く

株式会社 山田製油

代表取締役　山田 康一さん　桂本店店長　大村 玉緒さん　販売部主任　小林 明弘さん

ミネラルやたんぱく質が豊富で、抗酸化作用のある健康食材として知られているゴマ。その種子を圧搾して作られるごま油は、健康や美容に欠かせない油として注目されています。今回紹介するのは、自らを「へんこ（頑固）」と称し、高い品質にこだわったごま製品を製造販売する山田製油。手間暇を惜しまない製法はもちろんのこと、原料の確保から、販売方法、副産物の再利用までこだわりを貫き、ゴマの魅力を追求し続ける「へんこ」企業の取組に迫ります。

「へんこ山田」の香り高いごま油

桂離宮にほど近い住宅地の一角に、本社工場を構える山田製油。「京都･山田のへんこ一番絞りごま油」と染め抜かれた暖簾をくぐると、ゴマの芳ばしい香りが漂ってくる。「一番絞りだけを使っているので、飲めるほどまろやかですよ」と語るのは、社長の山田康一さん。その力強い口調からは、親子三代にわたり丁寧に作り続けている自社製品への自信が窺える。

創業者である祖父・豊氏がごま油作りを始めたのは昭和9（1934）年のこと。病弱だった豊氏がマクロビオティックを提唱する桜沢如一氏に出会い、玄米正食で健康を取り戻したという。この時、桜沢氏から「世のため、人のためになる食品を作ってみては」と背中を押されたことに始まる。「ええもん使こて、旨いもん作らなあかん」という同社のポリシーも豊氏のこの体験が基になっている。

ゴマは外国からの輸入がほとんどだが、「安心して食べてもらえるものを」と無農薬栽培にこだわり、自らエチオピア、ミャンマーなどに出向いて信頼できる農家から取り寄せている。「うちのごま油は香り高いのが特長。ゴマの焙煎が香りを決めるので、機械任せにはできません」と手作業を守る。化学調味料など添加物は一切使わない。創業者の精神と製法を頑なに守り、美味しさのために手間暇を惜しまない山田社長の「へんこ」な姿勢がいつか同社の愛称となった。京都のごま油屋「へんこ山田」の名はいまや全国に知れわたっている。

子どもたちに語りかける山田社長

できたての味を届ける“はかり売り”

ごま油作りからスタートし、現在ではごま油のほか、練りごま、炒りごま、らあ油・タレなどのごま調味料、ゴマを使ったスイーツ、スキンケア製品など、約50アイテムを揃えている。

地元の人々に好評なのが、桂売店で行っている白ごま油の「はかり売り」。同社の空ビン（140g以上）を持っていけば、出来立ての油を詰めてくれる。新鮮で風味豊かな油を詰めてもらえるうえに既製品より少し割安になるとあって、常連客に喜ばれている。「もちろん詰める手間はかかります。でも、お客様にできたてのごま油を提供したいので、はかり売りは続けていく」という。量産志向でなく、質を重視してごま油を作り続けてきた同社の、これもへんこな一面だ。

ドイツでは、はかり売りの店は珍しくない。多彩なオイルやビネガーが並び、味や香りを確かめながら好みのものを必要な量だけ購入できる。そんなドイツ式のはかり売り専門店が東京・代官山にあり、同社のごま油を取り扱いたいとの問い合わせがあったという。手間暇かけたこだわりのごま油を、新鮮で風味のよいまま食卓へ届けることができる。はかり売りは、作り手にとってもうれしい販売スタイルなのかもしれない。

はかり売りは、買い手にも作り手にもうれしい（代官山にあるはかり売りの店の様子）

絞りかすの再利用における新たな取組

ごま油の製造工程で必ず出るのが、ゴマを絞った後の絞りかす。貴重なゴマなので、絞ったかすも無駄のないように家畜の飼料や野菜の肥料などに活用している。『一番絞りごま油の油かす』（1kg入り300円）は、畑や家庭菜園の有機肥料として使われ、土中の微生物の栄養源となって土壌の改善に力を発揮。また、これを飼料として育った養鶏場の平飼い地鶏の卵をたっぷり使ったプリンなども製品化されている。

さらに新たな取組として、他企業と共同で、より付加価値の高い機能性食品への利用を目指すプロジェクトが進んでいる。タッグを組むのは、亀岡市で本格醸造醤油を製造販売している竹岡醤油株式会社。同じゴマから二度三度と油を絞るものが多い中、同社で使うのは雑味のないすっきりした味わいの一番絞りのみ。一度しか絞っていない絞りかすには、たっぷりの栄養素が残っている。これに着目した竹岡醤油の社長が、ゴマの絞りかすを醤油の原料にすることを発案。試しに、京都学園大学バイオ環境学部で含有量を調べてもらったところ、醤油の主原料である大豆の代替として十分な量のたんぱく質や旨味成分が含まれていることがわかった。「ゴマはゴマリグナンや有用脂肪酸など健康機能成分も豊富なので、研究開発が進めば、将来的に美味しくて身体にやさしい“ごま醤油”が誕生するでしょう」。

大村店長（右）と小林さん

子どもと母を守るゴマクロ事業

ゴマを通したさまざまな活動を展開する中で、今年1月、烏丸御池に同社がプロデュースする「ゴマクロサロン」がオープンした。ゴマを使った料理を提供するレストランの運営、ごま製品を使った新しい食べ方の提案、さまざまな企業とコラボしての商品開発、食に関するセミナーや消費者参加型イベントの開催、会社やごま関連の情報を掲載する「へんこごま新聞」を発行するなど、情報発信も活発に行っているが、ゴマクロサロンは、その取組を集約させた活動拠点ともいうべきサロンだ。テーマは「未来ある子どもたちとお母さんを守る」。そこには、「食の安全や環境に関心をもってほしい」という思いがこめられている。1階には、野菜とゴマをふんだんに使ったヘルシーメニューが楽しめるダイニングカフェを中心に、こだわりの調味料や、有機野菜などを販売するセレクトショップも併設。2階にはイベントスペースが設けられ、食の安全や環境に関するさまざまなイベントが開催されている。

この他、ウガンダを環境破壊から守るプロジェクトや、放射能に対する取組などにも力を入れている。

「世のため、人のためになる食べものを作る」という創業者の思いを原点にした、へんこな企業の取組がこれからも人々に笑顔と健康を届けていく。

ごま油の手絞りワークショップ（京エコロジーセンターにて）

●株式会社 山田製油　http://www.henko.co.jp

京都本社・桂工場（売店）
住所▶〒615-8075　京都市西京区桂巽町4
TEL▶075-394-3276　FAX▶075-394-3283
営業時間▶9:00～19:00　定休日▶年末年始
イタリアンレストラン「ピッコロモンド・ヤマダ」（水曜定休）を併設

胡麻工場
住所▶〒629-0311　京都府南丹市日吉町胡麻ミロク27-10

gomacro Salon（ゴマクロサロン）
住所▶〒604-8207　京都市中京区新町通御池下ル神明町67-3
TEL▶075-257-5096

桂工場、胡麻工場ともに、“ごまかしなし”の手作りの現場を見学することができます。
（要予約・詳しくは桂工場へお問い合わせください。）

京都本社・桂工場（売店）

藤原幸子（平成27年７月29日、８月８日取材）

若い世代と一緒に、地球環境について考える企業でありたい

～京都から世界へ、島津製作所、140年目のメッセージ～

島津の森
新本社棟の南側に整備された8,000m²の緑地帯。地域植生や生物の営みに貢献していることなどが評価され、ハビタット評価認証（JHEP認証）において、最高ランクのAAA評価を取得している。

株式会社 島津製作所　地球環境管理室マネージャー　三ツ松昭彦さん

三ツ松さん

京都を代表する企業、島津製作所の創業は明治８（1875）年。西洋文化が華開く中、教育機関などでは理化学器械の需要が高まり、初代島津源蔵は確かな腕と何事にも挑戦する姿勢で、110種類を数える理化学器械（物理器械）の製品化を成し遂げました。また、日本で初めて有人軽気球の飛揚に成功するなど､周りを次々と驚かせる結果を出し続けました。それから140年。科学技術で社会に貢献し、「“人と地球の健康”への願いを実現する」企業として、島津製作所は発展し続けています。高度な技術力を地球環境の保全に活かすことはもちろん、職場内での環境活動や若い世代への環境教育にも力を入れています。本社内ではどのような環境取組を実践されているのか、地球環境管理室マネージャーの三ツ松さんにお話を伺いました。

新本社棟はまるごとエコ！

平成26年６月に竣工した新本社棟では､環境に配慮した様々な仕組みが見られます。自然通風をうまく活用した自然換気システムや、各フロアの天井面には冷温水が流れる放射パネルが設置され、穏やかな熱交換を行う放射空調システムが導入されるなど、少ないエネルギーで適切な室温・湿度が保たれるように設計されています。また、太陽の動きに合わせて光を取り込むことができるブラインドも設置されており、自然採光によって照明の負荷を軽減する工夫もされています。更に、全館にてLED照明を採用し、京都府産の木材の積極利用を進めるなど、建築物の環境総合性能評価システム（CASBEE）において最高評価であるSランクの認定を受けました。

本社ビルの全景

鳥も、昆虫も、人も喜ぶ「島津の森」へ

新本社棟の竣工に併せて、昨年の秋には広さ8,000m²を誇る「島津の森」が誕生。造成には、敷地内から出た落葉や雑草を用いた腐葉土と木製パレットや梱包材を炭化処理した土壌改良材が用いられるなど、資源の循環利用を行い、環境負荷を軽減しました。回遊型の造成地には、スタジイやアラカシなどの在来種を中心とした樹木が植えられ、地域の植生を守り、生物多様性を保全する役割も担っています。社員有志による鳥や昆虫などの観察も進められ、徐々に生態系が構築されているという嬉しい報告もあるようです。今後は、地域の財産として、この森が育む恵みをどのように地域に還元していくのかが検討されています。鳥にも、昆虫にも、そして人にも心地よい場として活かせるよう、島津の森のこれからの歩みに期待が集まります。

島津の森

「え～こクラブ」は島津の誇り

もう一つ、島津製作所の環境活動を考える上で重要な役割を果たしているのが「え～こクラブ*1」です。平成11（1999）年から総務部の女性社員が中心となり、「環境に良いことをしよう」を合言葉に活動を始めました。職場から出た古紙からポケットティッシュやオリジナルのノートを作製したり、社員一人ひとりにマイバックや携帯灰皿の持参を呼び掛けたりと、身近なことから取り組める啓発活動を行っています。子どもたちへの環境出前講座も積極的に行っており、毎年小学校高学年～中学生を対象に、世界の水問題やごみとリサイクルについて、また地球環境と生物多様性についてなど、テーマ別に講演をしています。出前講座と併せて、環境学習支援ツールの制作にも力を入れており、水資源の保全や、地球温暖化防止について学べる双六や生物多様性をテーマにしたカードゲーム「bidi（ビディ）」など、遊びと学習を併せた優れたゲームを開発しています。

「『え～こクラブ』の活動は、他の企業からも注目されることが多いんですよ」と三ツ松さん。月に１度のミーティングは就業時間内に行われ、その活動は社の誇りとして、社内の協力体制も整っているといいます。島津製作所と子どもたちを繋ぐ｢え～こクラブ｣の活動。彼女たちが蒔いた種は､様々な色や形の花となって社会に咲き続けています。

「え～こクラブ」の出前講座の様子

学生たちの環境保全の意識を高めるために

近年では、地球環境保全について学ぶ学生が増え、企業の環境活動にも注目が集まっています。島津製作所では環境学科を専攻する大学生を受け入れ、自社の環境管理体制についての説明や、排水設備や廃棄物の保管場所の見学など、普段はなかなか見ることができない企業の取組を紹介しています。「京都は環境教育に熱心な大学が多く、大学と企業が連携して地域の環境保全や研究に取り組むなど、良い関係が築かれています。私たちは、若い世代の人たちと対話をすることで、開かれた企業であり続けたいと願っていますし、彼らが科学技術に興味を持ち、社会の役に立つアイデアを生み出す人材となってくれることを願っています｣。三ツ松さんの目は真剣です。忙しい日々の業務の中で、社会貢献を実践される島津製作所。創業当時から脈々と受け継がれる「社会に役立つ企業でありたい」という情熱を強く感じた取材でした。

＊1…　「え～こクラブ」の環境出前講座や環境学習支援ツールについてのお問合せは、
株式会社 島津製作所 地球環境管理室内 え～こクラブ　TEL：075-823-1113　FAX：075-823-2062
E-mail：kksitu@group.shimadzu.co.jp　までお願いします。

「株式会社 島津製作所」　〒604-8511　京都市中京区西ノ京桑原町１　電話　075-823-1913
URL：http://www.shimadzu.co.jp

松村香代子（平成27年７月13日取材）

KOKA GREEN KEEPER

グリーンキーパーがゆく

京都工芸繊維大学大学院教授
木村 照夫 先生

繊維リサイクルを研究して 25 年 ～木村照夫先生の飽くなき探究～

工芸繊維？繊維をひたすら研究している大学なのかな？今回は前号の京都大学に引き続き、左京区のもうひとつの国立大学である京都工芸繊維大学を訪問し、そこで教育・研究を幅広く展開されている木村先生に、繊維リサイクルについてお話しを伺いました。

繊維のリサイクル

「なぜ、繊維のリサイクルを研究するようになったのですか？」と尋ねると、「話せば長くなるよ！」とにっこり笑う先生。先生が研究を始められたころ、本来捨てられるはずの繊維くずを使った強化プラスチックを作り出すことに成功したことがきっかけだそうです。この「本来捨てられるはず」というところがポイントで、これをうまくリサイクルしていくことが、「サステナビリティ（持続可能性）」だと力を込められました。

捨てるはずの野菜を活かす！

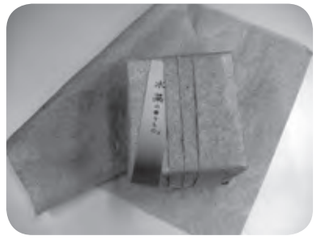
需給バランスの崩れや、形の不揃いなどの理由から、野菜生産量の約４割が廃棄処分されているといわれています※。「何とかこの野菜を有効利用できないか！」そう考えた先生は、近年、この廃棄野菜を、「食べられる紙」「梱包材」「インテリア製品」へとよみがえらせる研究をされているそうです。実用化に向け、繊維の可能性と新たな価値の創造に取り組まれている先生の頭の中は、ぶっ飛んだアイデアでいっぱいです！先生の部屋の前にあったニンニクの皮の袋詰めがごみではなく資源であることが理解できました。

モットーは「ごみは資源」

最後に、「最近の学生に対して思うことは何ですか？」と尋ねると、「修理せずに何でもすぐに新しいものを買おうとするね。」と少し寂しそうに答えられました。先生は、まちを歩いていると何でも資源に見えてくるそうです。「これもあれもリサイクルできるな」という具合に。先生がリサイクル技術のお話をされるとき「なかなかうまくいかないんだけどね！」と笑顔で答えられるのが印象的でした。きっと、繊維リサイクルの苦労や工夫のプロセスの中に楽しさや地球の未来への確かな手応えを感じておられるのだなと思いました。

野菜紙のうちわWSの様子

廃棄野菜がよみがえる。食べる紙に大変身！



※参考資料：田村有香「食品系廃棄物処理と減量に向けた取り組みの現状及び将来性についての研究」（佛教大学大学院紀要社会学研究科篇　第42 号（2014 年3 月））

繊維で作ったマグネットバー。
紙面ではお伝えできないが布地の色がそのまま活かされている。

木村 照夫　先生

京都工芸繊維大学大学院 教授
工芸科学研究科 先端ファイブロ科学専攻
未利用資源有効活用研究センター長
NPO法人 未利用資源事業化研究会 理事長

京都光華女子大学環境ボランティアサークルグリーンキーパー（平成27年７月７日取材）

なごみ日和

KBS 京都 アナウンサー
海平（うみひら）　和（なごみ）

●●第７回　「広沢池　灯籠流し」●●

今年は戦後70年。改めて平和を考えようと様々な企画展示なども行われ、私もお話を伺う機会が多かったのですが、戦争経験者の生の声を聞けるのは今しかないといわれています。戦争の経験はもちろん悲しく辛い過去なので、喜んで自ら話してくださる方はほとんどいません。だからこそ、今を生きている私たちは、その話を聞き、事実を知り、次の世代に伝えていかなくてはいけません。それは同じ過ちを犯さないために必要なことだからです。

今年も８月16日、京都ではご先祖様を送る五山の送り火が行われました。私は去年と同じく、鳥居形松明の送り火と共に、広沢池に浮かぶ遍照寺の灯籠流しの様子を伝えました。こちらの灯籠流しは、昭和25年から戦没者慰霊のために始まったそうです。今では全ての縁あるお精霊様を送るためのものとなっていますが、この節目に改めて平和についても考えてもらえたら…と遍照寺の生石住職は話されていました。身近な方の中に戦没者が少なくなった今、意識がうすれてしまっている部分はあるかもしれませんが、自分の身近な人、またご先祖様とのつながりを感じ、１人で生きているのではない、支えあって生きているということ、今があることを感謝してほしいとも。

五山の送り火も、戦時中、灯火管制のために行われなかった時期があったことも今年初めて知りました。それでも、なんとかお精霊様を送りたいとの思いでたくさんの方が白いシャツを着て如意ヶ岳に登り、白い大文字として行われたことも。このような時期も“送り火を守りたい”というたくさんの人の思いは生き続け、だからこそその思いがつながって、今も変わらず行われていることに、改めて、今の平和を当然と考えるのではなく、私たちが責任を持って守っていかなくてはいけないものなんだと感じました。

そんなことを考えながら眺めた夜空に浮かぶ鳥居形の炎と広沢池の灯籠の灯りは、例年より力強く、美しく思えました。

広沢池の灯り

海平　和：京都市出身、2010 年 KBS 京都入社。テレビ「京スポ」、ラジオ「森谷威夫のお世話になります」などに出演中。

ごみ減　イベント告知

布フェスin京都

布ってこんなに〇〇だ！

京エコロジーセンターとの共催、（一社）日本繊維機械学会の協力を始めとする、繊維に携わるさまざまな企業や団体の協力を得て、「布フェスin京都～布ってこんなに〇〇だ！」を開催します。

布に触れ、さまざまな使い方を楽しんでもらいながら、身近な布（繊維）の特性や新たな可能性を知ったり、布がどこで作られているのか、捨てたらどうなっていくのかなどを知り、布との付き合い方を見直して、大切に長く使う工夫や知恵について考えるきっかけになると幸いです。

日時　平成27年10月25日　10時～16時
会場　京エコロジーセンター
対象　どなたでも（一部、年齢制限及び要事前申込のブースがあります）
入館　無料（一部、参加費の必要なブースがあります）

＊詳しくは、当会議ウェブサイト又は京都市役所・区役所・支所、図書館等に配架のチラシをご確認ください。

ご来場
お待ちしています

地域活動レポート

～豊園地域ごみ減量推進会議～

地域愛を礎に　力を合わせてエコ推進

古布でリメイク、夏を乗り切る クールネックづくり

８月4日９時30分。温度計が30度を超えるなか、洛央小学校プレイルームには子どもたちや親子連れ11名が集まりました。「レッツ・エコチャレンジ！」と銘打った催しの始まりです。豊園地域ごみ減量推進会議・根来大三会長、豊園エコ学区推進委員会の冨江さゆりさんの挨拶に続き、地元での環境活動にも参画されている、ひのでやエコライフ研究所から<節電><リメイク><修理>をテーマにお話がありました。この企画を進める中、同じくこの地域にある早川刃物店さんで、何度も何度も研がれて刃が短くなったハサミを見せていただき、物を大切に使うこと、手入れをして長く使い続けることの大切さについて改めて皆に伝えていこうという話には、皆が聞き入っていました。その後は、いよいよ『クールネック』づくりのスタートです。

クールネックとは、保冷剤を入れた首巻き。首の後ろを冷やすことで、身体全体の温度を下げるというしくみです。冷凍した保冷剤なら即効果が。「年々暑くなる夏」を実感する近年、熱中症予防として注目され、商品もいろいろ出回っています。でも、捨てるのがもったいない布、お気に入りの柄や肌触りのいい布を材料に作れば、<リメイク>に。家にある身近な布がよみがえるよろこびあり、手づくりの楽しさもあり、なにより、すぐに役立つのがうれしい。指導するのは渡邊知栄さん。左京区で洋服のお直しと洋裁教室を開いています。

左から早川刃物店の早川雅也さん、豊園エコ学区推進委員会の冨江さん、中村さん、上村さん、早川刃物店の中下賢治さん

針や糸を持ち、作業する 子どもたちの笑顔

はじめは針や糸を持つ手がおぼつかなかった子どもたちも、形になるにつれ、作業に身が入ります。完成後「針が指に刺さったけど楽しかった」という子どもや「着なくなった洋服でも使いみちがあることがわかった」と話すお母さんら、参加者全員がよろこびの声をあげました。「レッツ・エコチャレンジ！」の取組は、京都市ごみ減量推進会議の「平成27年度市民等からの提案によるごみ減量モデル事業助成」に採択された事業で、豊園エコ学区推進委員会との協働で８月3日・4日・５日と３日間開催され、41名が参加しました。企画から準備、当日の実施まで関わった冨江さんは「子どもたちが浮かべた笑顔が忘れられない」と、次世代につなぐエコ活動の継続に前向きです。

ワークショップの様子

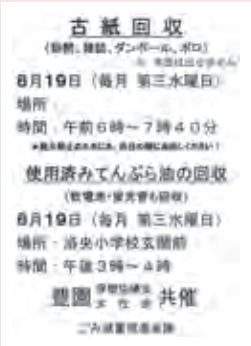
毎月水曜日の資源物回収 徹底することがエコの基本

豊園地域ごみ減量推進会議 根来会長（左）、３月まで会長を務めた長谷田さん（右）

豊園地域ごみ減量推進会議のエリアは、京都市下京区にあたり、南北は四条通から松原通、東西は柳馬場から烏丸通を領域とし、仏光寺通りに位置する洛央小学校は地域活動の核でもあります。立ち上げは平成19年。自治連合会や保健協議会、女性会の結束力を礎とし、使用済てんぷら油の回収実施をきっかけに発足。さらに資源物として乾電池や蛍光灯の回収も加え、環境への取組を視点とした施設見学も行っています。

古紙をはじめとする資源物回収は、毎月第３水曜日に実施。午前は新聞、雑誌、ボロなど、午後は使用済てんぷら油。地域への徹底を図るためには「くり返し呼びかけること」がなによりと、わかりやすいチラシを作成、町内110組に回覧板を回し、ポスターを街角の市政広報板に掲示しています。毎月のチラシづくりやポスター貼りは、手間のかかる作業です。長年、地域活動に尽力され、今年３月まで会長を務めてきた長谷田徳子さんから、今年４月、会長職をバトンタッチした根来会長は「ごみ減量のためだから手間は惜しまない」と気概を持って語ります。近年は、保健協議会、女性会との協働で、CDやビデオテープなど記憶媒体類、小型家電類などの資源物回収の取組も積極的に実施しています。

高層マンションや商業施設が増え、人口構成も家族形態も急速に変わりつつある豊園地域。ごみ減量や環境面では新たな課題が浮かび上がっていますが、根来会長、長谷田前会長、そして冨江さんたちの地域愛に支えられたエコ活動の取組が明日を拓くことを確信しました。



古紙回収
（新聞、雑誌、ダンボール、ボロ）
8月19日（毎月 第三水曜日）
場所：
時間：午前6時～7時40分
使用済みてんぷら油の回収
（乾電池・蛍光管も回収）
8月19日（毎月 第三水曜日）
場所：洛央小学校玄関前
時間：午後3時～4時
豊園 共催

資源物回収を知らせるチラシ。毎月作成する。

森田知都子（平成27年８月４日取材）

編集・発行／京都市ごみ減量推進会議　普及啓発実行委員会　〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町13 京エコロジーセンター活動支援室内
TEL:075-647-3444／FAX:075-641-2971　E-mail: gomigen@kyoto-gomigen.jp　URL: http://kyoto-gomigen.jp/

植物油インキで印刷しています。 VEGETABLE OIL INK
この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！